

ジッドとクロソフスキー：「生きた貨幣」をめぐって

森井, 良
早稲田大学文学学術院：助教

<https://doi.org/10.15017/1794493>

出版情報：Stella. 35, pp.287-300, 2016-12-19. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



ジッドとクロソフスキー

——「生きた貨幣」をめぐる——

森 井 良

はじめに

我々は別稿でジッドにおける「デイスポニビリティ」の概念の経済的意義を論じた¹⁾。ジッド的デイスポニビリティとはまず財を2つに分裂させ、一方を貯蓄へ、他方を消費へとまわし、要するにこれらを「運用する」ことであった。いま改めて強調したいのは、デイスポニビリティが「財 *propriété*」という語の二重の意味、つまり「(人が) 所有するもの」と「(人に) 固有のもの」、「所有」と「固有」を同時に喚起している点である。ジッドの所有はこうした二重性のもとで把握されなければならない、その二重性＝両義性は「交換しうるもの」と「交換しえないもの」の一見対立しながら実は相互浸透的な関係をも射程に入れている。

財を自由に処分する能力によってジッド的主体は与えながら所有するという逆説的な振る舞いを我がものにできるわけだが、こうした傾向は次の一文の内容と共鳴するように思われる——「私の財は、これを譲渡することによってのみ、私にとって譲渡不可能なものでありつづける」²⁾。かつてジッドの私設秘書でもあった作家ピエール・クロソフスキーの言葉である。両者の関係は後述するとして、ここでは彼らがともに「伝達不可能なものの伝達」を問題にしていたことを指摘しておきたい。この理論的に不可能な伝達を実現するためには、2つの方法のいずれかを選択しなければならない。ひとつは、最も普遍的な等価性の記号である貨幣の助けを借りて、伝達不可能なものを量的に交換可能なものに還元する便法であり、他方は、この伝達不可能なものを接収してありのままの形でまると流通させる一種の秘法である。クロソフスキーが後者を夢想のうちに採用したとすれば、彼の精神的な父とも言えるジッドはどう対処しただろうか。ジッドがかつての秘蔵っ子の思想、「生きた貨幣」の思想に肉迫した

とすれば、両者の比較検証はどこまで可能だろうか。簡単には解きたいこれらの問題を念頭に置きつつ、本稿ではジッドとクロソフスキーにおける所有のモードあるいは身体=財の主題について検討してみたい。

ジッドとクロソフスキー

ジッドがライナー・マリア・リルケを介してクロソフスキーを知るのは、1922年のことである。当時まだ18歳たらずのポーランド出身の青年に、50歳を過ぎた作家はさんざんな苦勞をさせられた。ピエールの父に請われて、ヴィユー・コロンビエ座の俳優養成学校への入学交渉を引き受け、さらにパリでの住居も見つけてやらねばならなかったからである。翌年、ようやくピエールがパリに到着したとき、悲願であった「小説」(『贗金づくり』)の執筆に取りかかっていたジッドは、仕事を手伝わせようと青年を私設秘書として雇う。言わばパリでの後見人の役目を引き受けたジッドは、ピエールとその弟で後に画家として大成するバルチュスの素行の悪さに手を焼きながらも、彼らをよく庇護し、思想・芸術上の教育を施した。実際、作家は自らが書いた未発表作品のいくつかを年少の秘書に見せ、後者は『コリドン』(1924年)の最初の読者となる光栄に浴したばかりか、実現こそしなかったものの『贗金づくり』(1926年)の挿絵画家に指名されたりもした³⁾。

壮年の大作家と未来の異端作家との事実上の関係ないし相互影響の可能性は、どこまで強調しうるのか。影響関係の実態はいまなお曖昧で、謎めいてさえいる。それは証言や伝記的資料の不足に起因するのだが、そもそも誰もが適切に論じることができないとはいえ、クロソフスキーのテキストの大半にジッドの影が透けて見えるのは確かだろう。たとえば、「模像」^{シミュラクル}というクロソフスキーが好んで駆使した概念は、モデル／コピーのシステムに抗するかぎりにおいて、ジッドの「贗金」を想起させるものであるし⁴⁾、一方の「悪神」^{デモン}への関心は他方の「悪魔」^{ディアブール}に対する執心と多分に照応してもいる。そもそも主体の同一性の解体、自我の分裂、それらを表象する芸術活動のうちに、両作家の親近性は明らかであるように思う。

とりわけ『歓待の掟』(1965年)において、クロソフスキーはいくつかの構造、モチーフ、主題をジッドと共有している⁵⁾。『ロベルトは今夜』(1954年)、『ナントの勅令破棄』(1959年)、『ブロンプター』(1960年)からなるこの3部

作には、オクターヴとロベールという夫婦のきわめて特異な態度が見出せる。作者が言うところの「歓待の掟」を構成する態度である。クロソフスキー自身が『ルサンブランス』(1984年)で解説しているように、この態度は「夫による妻の姦通」を内実としながら、実際は「主人が自分の妻(女主人)を招待客たちに提供する」ことを要請するという。オクターヴ＝ロベルトの営為あるいは「歓待の掟」の奥義について作家は次のように詳述している――

こうしてオクターヴは、よそ者や見ず知らずの者との交渉をつうじて、ロベルトの真実のアイデンティティを暴こうとする。というのも、自分が夫婦間の結合のなかで知りえているのは、妻の見せかけのアイデンティティ、つまり偽りのアイデンティティでしかないと信じているからだ。つまるところ、彼はロベルトのうちに複数の本性を見透かしているのであり、これらの本性は、ゆきずりの愛人たちが介在しなければ、表に現れ出てこないはずのものなのだ。ただしこうした企てが意味をもつのは、もっぱらロベルトがオクターヴの交換不可能な財でありつづけるかぎりにおいてでしかない。この企ては矛盾を孕んでいるからこそ意味をもつのだ。オクターヴは放棄〔譲渡〕しえない財をそのつど放棄〔譲渡〕することによってはじめて、そこから快楽を受けとる。日常的記号のコードのなかに、つまり日常世界のなかに、もうひとつ別の要素が介入してくる。すなわち価値という要素だ。他者の眼差し、つまりは需要というものが、以上のやり方で提供された妻の価値を高めてゆくのである。⁶⁾

おそらくここでは、妻を他人と共有することで夫が実現しようとする快楽享受の平等主義と、妻と閨男の姦通の現場に立ち会うことで快感を得るカンドールヴォワイエリスム王的な窃視趣味が問題とされている。閨房における2つの主義はいずれもジッドに馴染みのものであり、そのかぎりにおいてクロソフスキーをジッド主義の正統な継承者と改めて見なすことが可能だろう。ただし『ルサンブランス』で強調されているように、一見無道德にみえる「歓待の掟」は普遍的な道德を根こそぎ排除するものでは決してなく、それどころか「一夫一妻的な所有原理」に基づいており、つまりは原理を支える私有財産権のうえに立脚している。クロソフスキーによれば、この点においてこそオクターヴ＝ロベルトの営為は、フローベールやトルストイが描いたような「放蕩」リベルティナージュと区別され、サドが見事に例証した「普遍的売春」との差異が明確になるという⁷⁾。

クロソフスキーの特異性が際立つのはこうした指摘においてだろう。さらに言うなら、彼の特異性ないしは両義性もまた、ジッドの影響を免れていないの

ではないか。ジッドは自らのカンドール王（1898年の同名戯曲の主人公）に次のように言わせていた——

所有していることを誰かに知ってもらうのでなければ、私は所有できないのだ。[…]
とくに他人が私の財を享受しているとき、私はようやく自分の財の存在を実感する。
[…] 新しく財を手に入れるたびに、それを試したいという欲望にまた駆られる——つまり所有とは、私にとって実験することなのだ。⁸⁾

カンドールが体现する「所有のセンスの欠如」が作家自身も含めた大半のジッドの主体に共有されているとすれば⁹⁾、クロソフスキーの「歓待の掟」はこうしたジッド的所有の様式をひそかに継承しているように思われる。翻って言うなら、『ルサンブランス』の「他者の眼差し」についての記述（「他者の眼差し、つまりは需要というものが、以上のやり方で提供された妻の価値を高めてゆく」）は、いみじくもジッド的所有——財の放棄や贈与を志向する（脱）所有——の裏側にひそむ投機的エコノミーを解説しているだろう¹⁰⁾。

「所有のセンスの欠如」に条件づけられた作中主体の所有様式を、クロソフスキーは自らの行動指針にまで仕立てている。「私の財は、これを譲渡することによってのみ、私にとって譲渡不可能なものでありつづける」。特殊と普遍、所有と贈与、占有と流通といった対立するカテゴリーが融合されている点できわめてジッド的と言えるが、こうした方針は『ルサンブランス』から遡ること14年、すなわち『ロベルトは今夜』の17年後に書かれた『生きた貨幣』においてよりよく看取できるだろう。この奇妙な貨幣論のうちにはニーチェ、フリーエ、サドといった象徴的人物の影響だけでなく、ジッドのそれもまた同じ強度で及んでいるのではないか。そこには^{モノガミック}単婚的でありながら独占的で共産主義的ですからある所有の問題と、ファンタズム（幻想）が投資される領域としての身体的所有と流通の問題とが重ね合わされている。まず注目すべきは、作者がサドの「普遍的売春」を参照しながら次のようなヴィジョンを提示していることである——

自分自身の身体を他者のそのように所有するのをやめること。これは倒錯者の想像力に固有の作業だ。倒錯者はあたかも自分のものであるかのように他者の身体のうちに棲みつき、そうして自分自身の身体を他者に与える。つまり、固有の身体がファンタズムの領域として回収されるのである。こうして身体は単なるファンタズムの等価

物となり、ファンタスムのシミュラクルとなるのだ。ファンタスムとその商業的価値づけのあいだにあって、評定不可能なファンタスムの価値を表す貨幣は、倒錯の表象様式の不可欠な要素となっている。倒錯者のファンタスムはそれじたいとしては理解不可能であり、交換不可能なものだ。したがって貨幣は、その抽象的な性格を発揮することで、一般に理解可能なファンタスムの等価物をつくり出すのである。¹¹⁾

クロソフスキーはサド的倒錯の世界をこう解説するのだが、そこでは貨幣による身体＝ファンタスムの交換、「貴重財の等価物」であり「倒錯的ファンタスムに資するための財の転用」である貨幣を介した交換が問題となっている。つまり身体の交換は貨幣の「幻想的」かつ「媒介的」機能によってまずは可能となるというのだが、以上のようなサド＝クロソフスキー的倒錯の世界は、ジツド的倒錯のそれとどれほど通じているだろうか。

「身体」対「貨幣」、 「身体」対「身体」

たとえば、ジツドが1893年にアルジェリアで見知り、1902年の『背徳者』に登場させたウールド・ナイルの女たちがすぐに想起される。彼女らは通りの男を相手に「自らの身体を売り物にする」が、これはウールド・ナイルというアラブの一部族に固有の慣習であった¹²⁾。『背徳者』を読むかぎり、同じ部族に属すると思われる少年たちもまたこの慣習を共有しており、ジツド的主体の典型であるミシェルを相手に身体的な奉仕の取引を行っている――

ここで私はわずかばかりのもので暮らしている。半分フランス人の宿屋の主人が少しの食料を用意してくれる。子供が〔…〕それを朝と夜に持って来てくれる。何スーかの金や愛撫と交換に。この子は知らない人たちの前では人見知りになるが、私といるときは優しく犬みたいに従順だ。彼の姉はウールド・ナイルで、毎年冬になるとコンスタンティーヌまで出て行って、道行く人に体売る。¹³⁾

アルジェリアの僻地に逃れたミシェルはこうして3人のデラシネたちと経済的・性的交換を行うにいたるのだが、とくに注目したいのは、彼が「何スーかの金や愛撫と交換に」少年から定期的な奉仕を受けていることである。年少者の寄進に対して、男色家は金銭だけでなく、自らの身体によっても支払っている。交換の経路に身体を参入させる行為が物語の終局において決定的に現れ、しかもそれはミシェルと関係を結ぶ少年が売春を習慣とする女と同じ部族・血族に属しているという事実によって縁どられている。自らの身体と相手の快楽

とを貨幣に換えること。ワールド・ナイルがそのような境地に——女は行きずりの相手との売春、少年は男色家との交わりによって——達しているとすれば、西洋人であるジッ드의主体もまた最終的にそこに合流したと言うべきか。

ところで、『生きた貨幣』の作者は「身体的記号の密かな活動による身体の交換」にかんして引きつづきこう述べている——

身体の交換の代わりに、中立的ながらそれゆえに多義的でもある記号を使った財の交換を採用することで、体制側は個人の自由、つまり人格の統一性を守ることができる主張する。しかし財を流通させているように見せかけて、貨幣は体制の名と利益のためにひそかに身体の交換を行っているのだ。[...] しかもサドが想像した秘密結社の意義とは、次のようなジレンマを白日のもとにさらすことにほかならない。身体の交換をつうじた人間どうしのコミュニケーションか、貨幣という記号のもとでの売春か。¹⁴⁾

「貨幣」対「身体」（間接的には対「身体」）か、「身体」対「身体」か。このジレンマはサドからクロソフスキーへの移行、つまり「死んだ貨幣」から「生きた貨幣」へのそれをすでに含意しているが、こうした移行こそ『背徳者』の主人公が物語の結末で経験したものではないか。

身体の貨幣化

『背徳者』の最終的な到達は、貨幣を獲得する目的においてのみならず、支払い手段としての身体の使用という意味で、ジッドにおける身体＝財の主題にとって重大な転回点をなしている。身体どうしの取引は「死んだ貨幣」から「生きた貨幣」への移行をすでに示唆するが、そもそも身体を貨幣に変換する予兆は他のジッド作品にも少なからず見出せるだろう。たとえば『法王庁の抜け穴』（1913年）の主人公ラフカディオは、自身の手帳——親代わりであった叔父のひとりが「収支計算」を記録させるために彼に与えた手帳——に次のような謎めいた文言をしたためる——

チェスでプロトスに勝ったことに対して＝1 プンタ
 イタリア語を喋っているところを見せたことに対して＝3 プンタ
 プロトスに先んじて返事をしたことに対して＝1 プンタ
 議論で相手を打ち負かしたことに対して＝1 プンタ
 ファビオの死を知って泣いたことに対して＝4 プンタ¹⁵⁾

こうした記述を手帳本来の目的に則った「収支計算表」の一部と捉え、「プンタ」を「外国の貨幣」と同定しつつ、そこに「善行と報償からなる子供じみたけち臭い裏取引」を見てとることは妥当な解釈かもしれない。実際、手帳を盗み見た異母兄ジュリウスはそうのように解釈するのだが、ここで見逃せないのは、盗み読みを背後から目撃していたラフカディオが、犯人を去らせた後、手帳に「変態野郎の汚い鼻をこの手帳に突っ込ませたことに対して＝1プンタ」と書き加え、次のような行動に出るところである――

〔彼は〕ポケットからナイフを取り出した。その刃はひどく尖っていて、もはや短い錐にしか見えなかった。彼はその刃をマッチの火で焼き、ズボンのポケット越しにひと突きして、ぐざりと腿にまで突き刺した。思わず顔をしかめざるをえなかった。しかし、まだ足りない。椅子に座ることなくテーブルのうえにかがみ込み、すでに記した文言の後にこう書き足した。「俺が察知しているのをあいつに悟らせたことに対して＝2プンタ」。¹⁶⁾

1プンタがナイフの切っ先のひと突きに相当するという事実から、「プンタ」が「先端」を意味するイタリア語に由来するのは明らかだ。つまり「プンタ」には罰金と身体的罰という二重の制裁が仕組まれているわけだが、他方で「善行と報償からなる子供じみたけち臭い裏取引」というジュリウスの解釈は、たとえラフカディオ本人によって棄却されるべきものであるとしても、真剣に受け止める必要があるだろう。というのは、いくらラフカディオが自らの犯した過ちの代価を「プンタ」で支払っていると考えていたとしても、その支払った貨幣が結局は彼自身に還流するかぎりにおいて、この行為はジツト的デイスボニビリテに特徴的な自我の運用――自己の利殖――を構成しうるからである¹⁷⁾。

「罰」と「報償」という2つの意義。結局、ラフカディオの行為はジツトという作家に馴染みの両義性へと回収されるべき行為なのかもしれない。しかし主体による自傷が支払うためであれ、支払われるためであれ、いずれの場合においても「プンタ」が等価性一般の問題、等価物の正当性の問題を惹起していることに変わりはない。1プンタはそれによって切り取られる自身の一部、つまりそこで損失された身体と等価でありうるのか。問題となっているのは、身体に属すべき対象の価値をまったく別の体系下にある基準によって測定することであり、社会哲学的な観点から言えば、身体は売買可能性から免れているにも

かわらず、身体的な損失を貨幣によって評定するということである¹⁸⁾。

言うなれば、これは身体を貨幣化する試みではないのか。少なくともラフカディオの「プンタ」は貨幣をそこに導入したという点で身体=財の主題に重大な展開もたらし、身体を貨幣価値、すなわち交換価値に換算するかぎりにおいて自己の貨幣化というきわめて特異な傾向を含意している。ここに「プンタ」問題の本質が立ち現れてくるが、実はこうした問題は『法王庁の抜け穴』だけにとどまらない。

身体の補償

『鎖を解かれかけたプロメテ』(1899年)の主人公は、伝承にしたがひ、ワシに自らの「肝臓」を与え、身体を毀損されるにまかせる。両者の関係は互いに同化できるほど固着的だが、そもそもプロメテのワシが「人間を貪り喰うもの」の象徴でありながら「〔プロメテを〕特徴づける唯一のもの」でもあり、同時に「売り飛ばすべき」もの、「絞め殺すべき」ものと見なされている点に注意したい¹⁹⁾。つまりこの猛禽はコーカサスの住人にとって自らの固有物でありつつ自らの所有物でもあり、二重の意味での「propriété」なのである。

そのかぎりにおいて、すなわち身体=財を毀損するという意味で、プロメテの供儀はラフカディオの自傷と同じ地平にある行為なのだが、我々が確認したいのは、前者が後者と同じく身体毀損によって失ったもの、あるいはジツ的両義性を考慮するなら、獲得したものの等価物を想定している点だ――

ワシは囚人を啄みつづけていた。囚人はワシを愛撫しつづけていた。そして彼は痩せ、愛情に消耗し、一日中ワシの羽を撫でさすり、夜はその翼の下でまどろみ、心ゆくまで餌を与えた――もはやワシは夜も昼もプロメテから離れなくなった。

「愛しのワシよ！ 誰がこれを信じるだろうか？」

「何をですか？」

「我々の愛が魅力的なものであるということをさ」[…]

「[…] 美しいワシよ、少なくともおまえは私に満足しているんだね？」

「はい、あなたが僕のことをとても美しいと思ってくれるなら」²⁰⁾

ジツ的少年愛を思わせる彼らの関係は、先に引用した『背徳者』のミシェルとウールド・ナイルの少年とのそれに符合する。さらに興味深いのは、プロメテがワシに対して身体贈与の見返りを奉仕あるいは愛情のかたちで求めて

いることだろう。実際、充分な力をつけたワシは獄に繋がれていたプロメテを救出することでその要求に応えるわけだが、それでも不等価交換に不満をもつ主人は身体毀損の補償を当のワシだけでなく、ある意味でワシが象徴するところの「群衆」（プロメテの講演を聞きに来た「聴衆」）²¹⁾にまで要求するようになる——

みなさん、私は期待していたのです。あなたがたが私のワシを愛してくださるだろうと。〔…〕だからこそ私は彼に身を捧げ、自らの魂の血で彼を満たしてきたのです……なのに彼を賞賛しているのは私だけなんですネ〔…〕ワシよ！ 私は自分の血で、自分の魂でおまえを育ててきたのだ。私の愛情のすべてを尽くしておまえを愛撫してきたのだ〔…〕みなさん、ご自分のワシを愛さなければなりませんよ。〔…〕なぜ愛さなければならないかという、やがてそのワシは美しくなるからです……これで私の話は終わり。みなさん、いまから私のワシが募金をしにまわります。みなさん、私のワシを愛さなければいけません。²²⁾

プロメテは群衆に彼自身のワシ（「私のワシ」）への貢献を感情のレベルで求めているのだが、同じ要求を「募金」をつうじて再提示している点も見逃してはならない。つまり彼は自らがワシに捧げた血肉の等価物を愛情と貨幣で受け取ろうとしているのであり、そこでの貨幣は身体（毀損）への補償を表象するものとなっている。

主体の一部が切り取られ、それが貨幣価値に変換されるとき、「プンタ」問題が再浮上する。実を言えば、この問題はプロメテの身体よりもむしろ、彼と同じく超越者（「大富豪＝ゼウス」）から「債務」を課せられるコクレスやダモクレスの身体において顕著だろう。事実、コクレスが大富豪から「平手打ち」をくらい頬に「傷」をもつ一方で、ダモクレスはこの犠牲者をつうじて「500フラン」の大金を受けとる。彼らは「傷」と「500フラン」のあいだに「関係」があるのをやがて察するにいたるが²³⁾、そもそもこの関係はプロメテの身体にもかかわる第2の事故によってすでに補強されている。というのも、パリのとあるカフェでワシがコクレスの「片目」とプロメテの「右の脇腹」を挟り取る騒動が起きた後、すかさず次の勘定書がダモクレスに対して切られるからだ。「コクレスの義眼代……3フラン50サンチーム」²⁴⁾。

彼らの「関係」、つまり毀損された身体と金銭の対応関係——身体的損失とその経済的補償の問題も含めて——は均衡にいたることがない²⁵⁾。このことに最

も自覚的なのは当事者たち自身にほかならないのだが、やがて不均衡によってダモクレスは過剰な良心の呵責に苛まれ、ついに「〔それによって〕死ぬ」ことになるだろう。他者の身体（毀損）と引き換えに手にした金を自らの身体によって返済しなければならなかったという意味で、彼の死は大きな転回点を示している。そしてこの転回点は物語の結末で生じたプロメテのワシ殺害と一致してもいるだろう。なぜなら、彼はワシに身体（「肝臓」）の対価を最終的にその身体で支払わせたと言えるからだ。

このように、『鎖を解かれかけたプロメテ』は「身体には身体を」という反法的な結論を示唆している。つまり身体に対する貨幣での支払いから身体による身体への支払いに移行するわけだが、こうした移行は、すでに「プンタ」問題——身体（毀損）と貨幣の連動性——を超えた一定のヴィジョンを示しており、先に確認したように『背徳者』のなかに再び見出せるもののなのである。

結論にかえて

作品を締めくくるにあたり、クロソフキーは貨幣を介した身体の流通——「死んだ貨幣」の流通——を退け、「生きた貨幣」というきわめて空想的な理論を前面に押し出してくる。人間じたいの貨幣への生成を壮大にうたう理論だが、そこでの身体＝貨幣は「財を保証する記号にもこの財そのものにも同時に適用され」、ありのままのかたちで、つまりその表象的・内在的価値を保持したままファンタスムの市場に流通するという。こうした条件下で身体を「死んだ貨幣」に交換されるにまかせる女たち（アイドル、映画スター、広告モデル等）を、クロソフスキーは嘆きを含んだ口ぶりで批判するだろう。彼女らは「産業的奴隷」であり、「他のどんな労働力よりも自由^デに使用^イできる＝自由自在である^スというわけではな^ホく、自らを記号や貨幣としてつくりあげるところか、死んだ貨幣に〈真正直に〉依存しなければなら^ニない^エ」²⁶⁾。

言うなれば、彼女たちの身体は生きた「贖金」として規定されるわけだが、こうした墮落したカテゴリーのうちに我々がすでに見たジツド的主体——ラフカディオ、プロメテ、コクレス、ミシェル、ワールド・ナイルたち——も含めるべきだろうか。自らの身体をシミュラクルとして扱いすぎているがために、彼らはそれを貨幣に従属せざるをえないというのか。彼らの身体はレヴィナスが言うような貨幣経済的体制のうちに囚われ²⁷⁾、ジツドと同時代に発展した産

業資本主義の虜になっているということか。むげに否定はできないが、それでも彼らの幾人かが、本来的な存在であることを妨げるものを退けながら自らの統一性を回復することで、最終的にこの金銭^{グ・エ・ナ・ル}ずくの圏域から抜け出していることを改めて想起しておかなければならない。すなわち、完全な自己破壊の成就（分身としてのワシを殺害するプロメテ）、「収支計算」の破棄による無償の行為への志向（ラフカディオ）、身体と貨幣の交換から身体どうしの取引への移行（ミシェル）というかたちで。とりわけ最初の2人は、その行動の無償性ゆえに「生きた貨幣」の思想家の関心を惹きつける存在であろう²⁸⁾。

おそらくクロソフスキーの「産業的奴隷」ないし「死んだ貨幣」は、ジッドの「贋金」と同列に並べられる。なぜなら両者は若干のニュアンスを示しつつも貨幣と人間のアナロジーを援用しているからであり、そこでの人間＝貨幣は金としての重みを失い、まったく取り決めの貨幣、すなわち純粋なシミュラクルへと身を落とし、本来的な価値を失いながらも世界に通用するものとしてあるからだ。しかも彼らはこうした贋金の対極として真の貨幣を想定し、ある意味で推奨している。クロソフスキーの言葉で言えば、「財の等価物と財そのもの」である貨幣であり、ジッドによれば、「ちょっとでも何かにぶつかったら純粋で、実直で、本物の音を響かせ」る貨幣のことである²⁹⁾。

以上のことは、両作家の思想的交差だけでなく、クロソフスキーによるジッドの乗り越え、前者が参入したポストモダンの地平からの後者の遅滞性を示しているだろう。しかし仮説的であるとしても、ジッドが提示した視点のいくつかは20世紀の最も過激な思想のひとつ、クロソフスキーが想像するにいたった「生きた貨幣」の思想に繋がっていることは改めて確認しておかなければならない。この確認によってこそ、ジッドという世紀転換期の作家の役割、つまり2つの現代性——戦前のモデルニテ^{モデルニテ}と我々が生きる20世紀後半以降のモデルニテ——をつなぐ媒介としての役割が前景化されてくるはずなのだ。

註

- 1) 「ジッドにおける〈ディスポニビリティ〉の概念」、『ステラ』第34号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2016年、273-287頁。
- 2) Pierre KLOSSOWSKI, *La Ressemblance*, Marseille : Ryōan-ji, 1984, p. 20.

- 3) Voir Frank LESTRINGANT, *André Gide l'enquêteur*, vol. II, Paris : Flammarion, 2012, pp. 148, 203-204, 222 et 241-242 ; Alain ARNAUD, *Pierre Klossowski*, Paris : Éd. du Seuil, 1990, p. 185.
- 4) ジッドと「シミュラークル」概念の相関性については、次の批評に指摘がある——
 與謝野文子「模像の生産」, 『夜想』第22号, ベヨトル工房, 1987年, 110-111頁。
 なお, クロソフスキーにおける身体=財の主題については次を参照——鷺田清一「身体
 のプロプリエテ——『生ける貨幣』のための覚書」, 『ユリイカ』第26巻第7号,
 1994年7月, 164-185頁。
- 5) 構造の面では, まず『ナントの勅令破棄』と『贋金づくり』の相似性が挙げられる。
 前者はロベルトとオクターヴの日記を入れ子として挿入しており, これは後者にお
 けるエドゥワールの日記を想起させるものだ。おそらくクロソフスキーはジッドに
 馴染みの中心紋を駆使することで, 自身の小説に反射性と二重化の効果を当て込ん
 でいる——KLOSSOWSKI, *La Révocation de l'Édit de Nantes*, in *Les Lois de l'hos-
 pitalité*, Paris : Gallimard, 1965, pp. 13-103.
- 6) KLOSSOWSKI, *La Ressemblance*, *op. cit.*, pp. 14-15.
- 7) *Ibid.*, pp. 18-20.
- 8) *Le Roi Candaules*, in André GIDE, *Romans et Récits. Œuvres lyriques et drama-
 tiques*, vol. I [abrégé ensuite : *RR1*], Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la
 Pléiade», 2009, pp. 539-541.
- 9) 『背徳者』の主人公は, ひいきの少年が彼の所有品を盗むのをあえて見逃したり, 十
 分な財産を持ちながら自分が何を所有しているのか知らずにいたりするのだが, そ
 れらのことを友人のメナルクから一言で断罪されている——「世間でよく言われる
 〈センス〉というものがあるが, 君には〈センス〉が欠けているようだ。[...] 所有
 のセンスだ」(*L'Immoraliste*, *RR1*, pp. 622-650)。こうした欠落は「現実感の欠如」
 とともにきわめてジッド的な特質と見なされるべきものであり, 所有しているつも
 りが所有されている (*ibid.*, p. 652), あるいはカンドール王が述懐するように, 他
 者をとおしてでしか所有できない, といった派生的な事態を招く。
- 10) ジッドには財の放棄 (= 贈与) と売却を混同する傾向があり, たとえばその傾向を
 最もよく体現した『地の糧』のメナルクは, 「脱所有」を志向しながらひそかに財の
 投機を行っている (*Les Nourritures terrestres*, *RR1*, p. 385)。こうした振る舞いに
 表象されるジッド的所有の両義性および投機の主題は, すでに前掲拙論 276-283 頁
 で論じたところである。
- 11) KLOSSOWSKI, *La Monnaie vivante*, Paris : Éd. Payot & Rivages, coll. «Rivages
 poche / Petite Bibliothèque», 1997, p. 59.
- 12) Voir *Si le grain ne meurt*, in André GIDE, *Souvenirs et Voyages*, Paris : Gallimard,
 coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2001, pp. 282-283 ; *L'Immoraliste*, *RR1*, p. 691.
 ウールド・ナイルの女たち (『一粒の麦もし死なずば』では「ウーラッド・ナイル」
 と呼称) は, その特徴や容姿の点で, 『地の糧』で言及された「東洋の女たち」と容

易に結びつく——「私は自らのうちに自分のすべての財を持った。自分の財一式を身につける蒼ざめた東洋の女たちのように。人生のどんなにわずかな瞬間であっても、いつも私は自分の財すべてを身内に感じる事ができたのだ」(*Les Nourritures terrestres*, *RR1*, p. 359)。つまり彼女たちの慣習は身体=財という等式に立脚したジツドの主体の所有様式に帰されるべきものである。

- 13) *L'Immoraliste*, *RR1*, pp. 690-691.
- 14) KLOSSOWSKI, *La Monnaie vivante*, *op. cit.*, p. 61.
- 15) *Les Caves du Vatican*, in André GIDE, *Romans et Récits. Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. II [abrégé ensuite : *RR2*], Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2009, p. 1030.
- 16) *Ibid.*, p. 1032.
- 17) 自己の利殖を当て込んだディスポニビリテについては、前掲拙論 279-283 頁を参照されたい。
- 18) Voir à ce sujet François DAGOGNET, *L'Argent. Philosophie déroutante de la monnaie*, Paris : Les Belles Lettres, coll. «Encre marine», 2011, p. 99.
- 19) *Le Prométhée mal enchaîné*, *RR1*, p. 481.
- 20) *Ibid.*, p. 485.
- 21) 「群衆」は、この時期のジツドにとって「偉大な人間」を貪り喰う存在であった——「いやはや！ 群衆の危険とは、奴らが腹を空かしていることにもある。奴らは餌をくれと要求するのだ」(«De l'importance du public», in André GIDE, *Essais critiques*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, p. 431)。
- 22) *Le Prométhée mal enchaîné*, *RR1*, p. 492.
- 23) *Ibid.*, p. 478.
- 24) *Ibid.*, p. 480.
- 25) この問題はコクレスの片目に対する補償が提示された額にとどまらないだけにより深刻なものとなる。というのも、彼は「義捐金」によって「3 フラン 50 サンチーム」どころか自身の「不幸」の大元の原因である「500 フラン」を大きく上回る金を手に入れるからだ (*ibid.*, p. 483)。コクレスの「義捐金」はプロメテに講演会場での「募金」を着想させるが、いずれも身体(的損失)を貨幣に変換し、身体毀損を一種の投機に変える手段になっていることに注目しよう。
- 26) KLOSSOWSKI, *La Monnaie vivante*, *op. cit.*, pp. 74-76.
- 27) レヴィナスは「貨幣」に「価値を算定する可能性」としての「分割可能性」を見てとりながら、「正義〔公平性〕とはまさにあらゆるものを算定し、計量不可能なものを算定することである」かぎりにおいて、「貨幣は正義〔公平性〕の一要素である」と主張している。レヴィナスの貨幣論については次を参照—— Roger BURGGRAEVE, *Emmanuel Levinas et la socialité de l'argent. Un philosophe en quête de la réalité journalière. La genèse de «Socialité et argent» ou l'ambiguïté de l'argent*, Leuven : Peeters Publishers, 1997, pp. 18, 36, 60 et 48.

- 28) クロソフスキーは1章を割いて「無償性」——「価格外のものを享受すること、あるいはそれを代償なしに享受するのを認めること」——について論じている。まず「絶対的所有者」を「見返りに受けとるものが何であれ、自らに属するものを交換しようとは思わない」存在としているが、これはフィロクテート（戯曲『フィロクテート』の主人公、大富豪（『鎖を解かれかけたプロメテ』の超越者的な銀行家）、ラフカディオといったジッダ的の主体、すなわち「無償の行為」の担い手たちを思わせる。また次の考察はジッダ的無償性（脱所有、財の放棄、贈与）のうちにひそむ有用性^{ユティリティ}を説明するものでもあるだろう。「彼〔＝ 任意の主体〕は贈与すると、増長する。しかし贈与して減衰するどころか、増長できるとはどういうわけか。〔…〕 彼が価値をもつのは、受けとった以上の存在にならないでその手前にとどまる者の目から見てのことでしかない。よって、〔与えられたものを〕返すことができないのに受けとる者に対して彼が獲得する価値は、与えた以上のものを取り返す権利によって表現される。受けとる能力があるにもかかわらず、返す力がないという事態がなかったとしたら、与えるだけで受けとらない者が増長するという事態もまた生じてこないだろう」（KLOSSOWSKI, *La Monnaie vivante*, *op. cit.*, pp. 54-57）。
- 29) *Ibid.*, p. 76 ; *Les Faux-monnayeurs*, RR2, p. 324. 後者の引用はジッダ的「贋金」を定義づける私生児の少年ベルナルの言葉——「これから一生の間、僕はちょっとでも何かにぶつかったら、純粹で、実直で、本物の音を響かせたいと思う。今まで知りあった人たちはほとんどみんなまがいものの音をたてている。見かけと少しも違わない価値をもつこと。実際の価値以上に見せかけようとしないこと」。